

機関番号：34315

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24652107

研究課題名(和文) アブダビ首長国連合での日本語教員多文化性開発の考察

研究課題名(英文) Developing Interculturality through Japanese language teaching

研究代表者

ラムザン 優子 (Ramzan, Yuko)

立命館大学・国際教育推進機構・准教授

研究者番号：70589564

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円、(間接経費) 240,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は多言語多文化共生日本語教育を実践する教員の多文化性の理解の仕方を明白にし、それが日本語学習者の多文化性の開発にどのように影響を及ぼすのかを明確にし、現在世界の教育一般に求められている多文化間のコミュニケーションを円滑に執行することができる人材育成を目的にした言語教育に貢献するという目的の基に執行された。結果は「多文化共生教育」を目指すにあたり、言語教育の範疇で「多文化性」とは何なのかという教員自身の捉え方の重要性を明白にし、教員のその捉え方によって授業の到達目標、評価基準、授業活動、課題設定が全く違った体を成す事を示した。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted to see how the Japanese language teachers develop their interculturality through their experience of teaching Japanese language in UAE and other countries where Arabic is the main language and Islam is the main religion. The result of study was to contribute to the field of the Japanese language education that aim to educate students to be a skilful communicator in an intercultural context. The results indicate that the teachers of Japanese language need to be able to articulate about the meaning of Interculturality. The ways the teachers understand this concept influence them to set the important teaching elements such as setting the objectives of the lessons, the assessments criteria, the lesson activities and the assignments. The results suggest that it is necessary to include the new content in the language teachers education program beside the conventional contents.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育 多文化性 インターカルチュラルリティー

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は日本語教育を多言語多文化共生日本語教育と位置づけ、多言語的な状況がより豊かな社会へと導く人材の育成となりうるという教育理念を基盤に、教員の多文化性開発の考察を目的とし始められた。(2) 本研究はオーストラリアの学校教育で多文化教育の一環として導入された日本語教育開発研究を重ね、2007年には学習者の多文化性を開発し、それを高める人材育成に導くには教員個人々の「多文化性」という概念の理解の仕方が礎となると言及している(Ramzan, 2007)。しかし、教員自信の日本語教育者としての多分化性開発が明示された先行研究は少ない状況下にあった。

(3) 立命館大学、立命館宇治高等学校、コスモ石油株式会社、アブダビ石油、アブダビ首長国王立 IAT (Institute of Applied Technology) 高等学校は2011年9月より立命館大学日本語教育センターがそのアドバイザーとなり、IATで日本語教育を行うという連携プログラム協定を結んだ。そのIAT日本語プログラムが本研究現場となり2011年9月開講し、2014年6月が第一期生のコース終了となる。従って、当該プログラムの第一期生がコースを終了する3か月前に研究期間内に計画された。

2. 研究の目的

日本語教員の多文化性がアラブ文化圏で日本語を教える事によってどう変化、発展して行ったのか。また、日本語教育を多文化共生教育という観点からみた場合、教員自身の中で多文化性の発展がみられたとした場合はそれがどのように彼らの授業に影響を及ぼすのか

本研究は日本語教員がアラブ首長国連合という異文化圏に自らを配し、イスラム教を生活の基盤にしているアラブ首長国連合での日本語教育の導入という背景の下に以下を研究目的とした。

(1) 日本語教員がどのようなプロセスを通して、どのように多文化性という概念を理解して行くのかを明らかにする

(2) 教員が経験する教員としての自己開発のプロセスを分析し日本語教員の多文化性がアラブ文化圏で日本語を教える事によってどう変化、発展して行ったのかを探求し、彼らの多文化性開発を科学的に分析する。

(3) 教員自身の中で多文化性の発展がみられたとした場合はそれがどのように彼らの授業に影響を及ぼすのか、教員の多文化性開発と学習者の多文化性開発の関係性を考察する。

(4) グラウンデッドセオリーという研究方法を本事例研究で実践し、日本語教育の範疇でこの質的研究方法論がいかに有効かを論ずる。

3. 研究の方法

(1) 本研究者は教員自信の多文化性の開発、彼らの多文化性という概念の解釈と多言語多文化共生日本語教育の執行との関係を考察するために、立命館大学日本語教育センターの一員として、この日本語教育に関する連携プログラムに参加し、本研究を執行し、基に本研究を執行した。

(2) 研究対象者はIATで日本語を教える二人の教員を主にUAEの大学で日本語を教える教員2名に加えイスラム文化圏であるカタールの日本語学校の教員2名とした。

(3) 教員の内省レポートのテキスト分析、分析結果の信憑性を高めるためのインタビュー、授業参観ノート、現場検証記録を主たるデータとした。

(4) そのデータは、IAT教員はマナバフォリオというインターネットを利用したASAHI Net 開発のポートフォリオに投稿され蓄積されグラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析された。

(5) 2011年、2012年、でデータ収集が行われ、IAT日本語プログラムに参加する第一期のアブダビの高校生が卒業する2014年6月完結と計画された。2011年度は第一回目のデータ収集、そのデータ分析を行い、教員の内省レポートの分析結果を理論として導き出した。2012年度は新たに収集された内省レポートの分析にあたり、2013年にはその分析結果の概念間の関係を纏め上げた。

4. 研究成果

授業で「多文化共生教育」を目指すには、「多文化性」とは何なのかという教員自身の捉え方が非常に重要になり、その捉え方によって授業の達成目標、評価基準が、またそれを達成するための活動や課題設定が全く違った体を成す事を示した結果により今後の日本語教育を多文化共生教育と捉える日本語教育運営に貢献できたと願う。また、文化の相違を経験しながら学習者への理解の仕方、関わり方を通じ「コミュニケーションとは何か」という問いかけを自分に課し、日本語教員の教授ピリーフを構築しようとする姿勢は自己の中での「自」と「他」を考察する教員自身による内省を促すことにより確立され、その内省をする過程で発見した「他」に対する自分の中の「負」の感情が問題視できることにより、より一層海外で日本語を教える教員というアイデンティティの構築が促進されることが以下のように教員の内面的問題、環境的問題として纏められ、それはより新しい側面を含む日本語教育者育成プログラム構築への応用を示唆し、今後の問題点が明示された。

(1) 教員の内面的問題

教員としてのセルフアイデンティティ/自尊心/自信の構築、「多文化性(インターカルチュラルリティ)」の理論的な理解、教

員の内面から構築される「多文化性」の本質的理解が必要である。

教員としての不十分な経験、海外での日本人としての自身の捉え方が教員のセルフアイデンティティ/自尊心/自信の構築に影響し、それが確立しているか否かが、自省という行為からの新しい気付きに影響を及ぼす。また、多文化性(インターカルチュラルリティー)という概念の理論的理解は教員本人の経験などを通じての内からの気付きによるものでない限り、本質的理解に繋がらなく、それは、外国語教育により育成されるであろう「多文化性」という概念そのものへの不信感として残る。

(2) 環境的問題

現実味のないカリキュラムへの不信、属している教育機関からのサポートが教員の「多文化性」構築に強く影響を及ぼす

教員自身がそれぞれの日本語教育の現場では達成目標が異なりうるという認識を持つ事が必要であり、現実味のない達成目標の提示は教員の理解、モチベーションの低下となる。日本語担当として属している教育機関からサポートが得られ、所属教育機関が位置する社会との関わりなどが考察でき、それを反映したカリキュラム構築ができる教師としての成長を示した教員は「多文化共生教育」が実践できる。

(3) 教員教育

本研究を相対的に纏めた結果、今後の教員教育の到達目標に以下のような要点を含む事の必要性が示された。

日本語教師が教室でファシリテーターであるとした場合、その場に適したファシリテーターの定義を考える事の必要性を自ら発見できる。

「自」と「他」を考察する内省それに続く新たな発見の必要性を発見し、論議する。

その内省をする過程で発見した「他」に対する自分の中の「負」の感情が問題視でき、それを熟考する。

それぞれの日本語教育の場の達成目標が考察でき、問題視できる。

海外で日本語を教授する場合、それぞれの日本語教育の場の達成目標はその国の社会や文化を反映する。そこで教授する日本語教員はそこで展開される日本語教育に必要な社会文化的側面の重要性を理解し、自己が持つ教授ピリーフとは異なる期待を受け入れる許容性が必要とされる。その許容性は自然に備わるものではなく、これからの日本語教員養成プログラムに意識的に組み込まれる必要性が示された。本研究ではアラブ文化圏で教鞭をとる日本語教員によって「多文化性」の捉え方により授業方針が異なる事が示され、「自分への問いかけ」、「内省」、「気付き」

は教員としてのアイデンティティの構築を促進すると示された。それは技術や知識偏重ではない日本語教員に必要な許容性を育成する日本語教師育成プログラムに必要な実践方法をも示唆するものである。

(4) 今後の課題

シラバスの組織的な構成や、正しく文章作成する事に焦点を当てる傾向のある現日本語教員養成に加え、日本語教授が必要とされている社会文化を把握し日本語教授の必要性をその社会の全体像に位置付けて捉え、教室内外で読んだり聞いたりする言葉、ジェスチャー、無言時の空気感、そして発言をも言語コミュニケーションと捉える事のできる教員育成が必要であろう。そしてそのエッセンスが把握でき、それをグローバルコミュニケーションを配慮(awareness)する礎とし、スピーカー、ライターの声を明白にする為の情報とみなす事ができる教員養成プログラムの構築が今後の課題ではなかるうか。その配慮(awareness)は学生の経験や記憶に深く注意をはらい、また学際的(multidisciplinary)教員養成教育で教育された経験により学生自信の経験への振り返りから育成される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 4 件)

1. 北出慶子、ラムザン優子、山本恭平、海外現役教師の成長；日本語教員多文化性発展の考察、言語文化教育学会、2014,3.15 早稲田大学、東京都新宿区
2. Yuko Ramzan, Developing Interculturality through Japanese language teaching, The 41st Annual Conference of the Australian and New Zealand Comparative and International Education Society (ANZCIES), 2013.11.26-28, University of Newcastle, Australia
3. Yuko Ramzan, Developing Interculturality; Methodology, The world Council of Comparative Education Studies(WCCES) World Congress, 2013.6.24-28, University of Buenos Aires, Argentina
4. Yuko Ramzan, The construction of Interculturality; a case study of Japanese language teachers in

UAE,2012.8.2-4, International
Teacher Education Dialogue;
Innovation and New Ideas in
Teaching and Teacher Education,
Southern Cross University, Coffs
Harbour, NSW, Australia

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ラムザン 優子 (Ramzan, Yuko)
立命館大学・国際教育推進機構・准教授
研究者番号：70589564

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：